

H A N A Z O N O

Global

Vol. 4

花園から世界へ！

花園プレス・グローバル

ボストンキャリアフォーラムに見る、 日本の「就職」事情最前線。

毎年11月、3日間に渡って行われる
世界最大の就職イベント「ボストンキャリアフォーラム」。
アメリカ・マサチューセッツ州ボストンの会場に集まるのは、
約200社もの「日本企業」と、現地の大学に通う「日本人学生」。
これらの企業は、なぜ、アメリカに行くのか？どのような人材を求めているのか？
日本の大学生・高校生が、今、できることは何か？
「ボストンキャリアフォーラム」から見えてくる日本の就職事情を
花園のGTN・中村広記先生にうかがいます。



今、求められるのは“人財”。

「近い将来、日本の少子高齢化が進むことによって若い労働人口が減少し、これまでよりも少ない人数で社会を支えていかなければならなくなる。そこで、より優秀な人材育成が急務となり、学校教育が見直され始めた。まずは、大学入試の改革、それに伴って高校教育、さらには、中学校や小学校での教育改革も進んでいる。」ここまでは、第二号でお話ししましたね。大切なのは、広い視野を持ってこれを見てみることです。たとえば、「少子化社会だから、受験も就職も楽になってラッキー」というのは、きわめて個人的な、狭い視点です。そうではなく、受験・就職の易化によって、現在、社会全体がどうなっているかを考えてみて下さい。現在の社会には「人はいても、人材がない」と言われます。楽に大学を卒業し、楽に就職できても、そこから実社会で活躍していけるような力が身につけていない人が非常に多い。これでは、経済の発展など見込めませんよね。

ボストンキャリアフォーラムとは：

日英バイリンガルを対象とした世界最大の就職イベント。優秀な人材を求めて毎年約 200 社もの企業が参加し、3 日間に渡って説明会や面接を行う。フルタイムのポジションはもちろん、インターンシップや企業研究を目的とした参加者も多く、その場で内定が出ることもある。今年で 29 回目を迎えるキャリアフォーラムは、ボストンの他に、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンフランシスコ、ロンドン、シドニー、東京、大阪でも開催されている。

ボストンキャリアフォーラム 2015 参加企業：

アシックス、アステラス製薬、APPLE JAPAN, INC、江崎グリコ、NEC CORPORATION OF AMERICA、エレコム、大阪ガス、大塚商会グループ、岡三証券、外務省、花王、キリン、国際協力銀行、国際金融公社、コニカミノルタ、サイバーエージェント、サントリーホールディングス、資生堂、ジュピターテレコム (J:COM)、ジョンソン・エンド・ジョンソングループ、住友重機械工業、住友理工、全日本空輸、双日、ソニー、ソフトバンクグループ、第一生命保険グループ、ダイキン工業、ダイドードリンコ、中部電力、TWITTER JAPAN、ディスコ、テルモ、デンソー、ドイツ銀行グループ、東京ガス、東芝ロジスティクス、東レ、トヨタ自動車、トランスコスモス、ニコン、日清食品ホールディングス、日鉄住金物産、日本銀行、日本財団、日本政策投資銀行、日本郵船、日本たばこ産業、野村証券、野村総合研究所グループ、パナソニック、BMW GROUP JAPAN、光通信、日立化成、日立コンサルティング、日立製作所、ファーストリテイリング (ユニクロ)、マッキンゼー・アンド・カンパニー、みずほ証券、みずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、三井住友ファイナンス&リース、三井不動産、三菱商事、三菱電機、三菱東京 UFJ 銀行、三菱 UFJ フィナンシャル・グループ (MUFG)、三菱ふそうトラック・バス、ヤマハ発動機、LINE、ラウンドワン、楽天、LIXIL、リクルートホールディングス、ローム等 195 社。



一人ひとりの「個の力」が大きな力になる、ということでしょうか。「人材」という言葉には、“人財”という漢字が使われることもありますね。

企業や社会の「財産」としての「人」、という意味ですね。このことにいち早く気がついた日本の一流企業は、「ボストンキャリアフォーラム」に参加するなどして“人財”の確保に力を入れています。ボストンキャリアフォーラムというのは、日英バイリンガル、主に海外大学に留学中の日本人学生を対象とした、世界最大の就職イベントです。国内に「人材がない」といって採用の基準を下げるのではなく、海外から優秀な学生を採ってこよう、というわけです。ここにも、旧来の「学歴社会」の崩壊が見られますね。さらに、昔は、海外大学に進学することは、就職には不利になると考えられてきました。大学卒業の時期と入社がずれ、ということなどがその理由でしたが、最近では、「通年採用」といって、採用試験を留学生の帰国の時期に合わせて実施する企業も大変多くなっています。それほど、日本の大学生と海外の留学生の質には大きな差があるのでしょうか。

「できない」からこそ、やる。

具体的には、どのような違いなのでしょう。

そもそも、大学に入学するときの意識が違います。日本では、多くの高校生が「偏差値の高い大学に行きたい」と言います。そのような大学を卒業することに意義がある、という考え方がまだまだ一般的なんですね。一方、海外では「〇〇を勉強したい」という意思、明確なビジョンが先にあって、その分野に強い大学を選ぶのが普通です。「〇〇大学に行きました」と言うために大学に行くのではなく、あくまでも自分が、



自分のしたいことを勉強するために大学がある。入学してからも、そこからが本当の勝負ですから、必死で勉強するわけです。

なるほど。まずは、「自分(個)が何をしたいか」
なんですね。

それに、もちろん、教育制度の違いもあります。たとえば、日本が最近になって取り入れようとしている「アクティブラーニング」「反転授業」などは、海外では当たり前。小学校でもやっています。学校は、みんなで「討論する」ところ、そのための「知識をつける」段階は、各自、家で終わらせてくるというのですから、膨大な勉強量です。いわゆる詰め込み教育の先にある「クリティカル・シンキング」、つまり、自分の頭で考える力を鍛えるカリキュラムが確立されているんですね。

先程、先生の仰った「実社会で活躍していける力」が身につくそうですね。

先行きの見えない世の中、「たくさん知っている」ことも大切ですが、「知らないときに突破できる力を身につける」ことは、それ以上に大切です。知らなくても、できなくても、どんどん挑戦することです。花園生は、日本の大学に進学する人が多いと思いますが、その場合でも、周りに流されず、自分のしたいことに挑戦し続けてほしいと思います。それを四年間続ければ、必ず、社会に感謝される“人財”になることができます。

HANAZONO
Press
Global

花園グローバル・プレス、第四号はいかがでしたか？ 次号では、再び、中村先生と、世界で活躍されているグローバル人材の方との対談です。カリフォルニア州立大学ノースリッジ校卒業の舞台演出家・山崎萌子さんにお話をうかがいます。どうぞお楽しみに！（May K）